
〈超〉感性的なもののアイデア——ジョルジョ・アガンベンイメージ論

竹下涼(京都大学)

本発表が扱うのは、イタリアの哲学者ジョルジョ・アガンベン(1942-)の哲学、とくに彼のイメージとアイデアの関係である。アガンベンの美学についての数少ない先行研究によれば、彼の美学の中心的な問題は倫理であり、そこに彼の政治思想とも共鳴する〈生の形式〉の問題が現われてくるという(Darida 2022)。他方、近年では、アガンベンの政治思想を下支えする存在論的な骨組み、とりわけプラトンのアイデア論解釈に重要性を認める研究も出てきている(Jamali 2025)。このような研究文脈を踏まえた上で、本発表は、アガンベンにおける芸術と哲学の問題、すなわち美学をイメージとアイデアの問題として素描することを試みる。

本発表はアガンベンのアイデア論を問題にするが、アイデア論そのものを問題とするというよりも、イメージとの関係のなかでアイデア論そのものが変容していく様子を彼の議論のなかから引き出すことを試みたい。あらかじめ本発表の見通しを立てるとすれば、問題となっているのは、感性的なものと超感性的なもの、つまり、イメージとアイデアとの接触と変容である。言い換えれば、本発表は、アイデアやエイドスといった思想史的な負荷を帯びた概念を、感性的なイメージとして読み替えていくその微妙な手つきのうちにアガンベンに特有のアイデア論が現われてくる、という見立てをもっているということになる。このように、感性的なものと超感性的なものとの重ね合わせによって現われてくるアイデアのステータスをさしあたり〈超〉感性的なものと呼ぶことにする。

さて本発表は、1985年のニーチェ論「記憶の及ばない像」を議論の出発点とする。このニーチェ論を丹念に辿ってみると、論考全体がイメージの思想史を要約的に提示するものであることがわかる。そのため、この論考はアガンベンのイメージ論を支える背骨とみなすことができるであろうし、それによって、のちのアガンベンの議論の展開も見えやすくなる。そこから、『到来する共同体』(1990年)のアイデア論を経て『事物のしるし』(2008年)における「パラダイム」の理論において結実するアガンベンのイメージーアイデア論を描出する。

アガンベンは、プラトンのアイデアを単に超感性的なものの側に放逐するのではなく、同時に感性的なものでもあるようなイメージ論の枠組みで捉えなおす。それによって、アガンベンはアイデア界と現象界といった従来の哲学史がプラトンの思想を説明する際に用いてきた二世界論的な図式を更新しつつ、彼が「パラダイム(para-digm [傍らで示すもの])」と呼ぶ感性的なものと超感性的なものの循環図式を導入する。アイデアとイメージは互いの〈傍ら〉にあり、一方をつうじて他方へとたえず交替してゆく。以上のことを、本発表は、アガンベンに特有の〈超〉感性的なアイデア論をつうじて明らかにすることを目指す。